

知的優秀児の特性に関する基礎研究 (第1報告)*

—発達的特徴について—

東京家政大学

森 重 敏**

I 問 題

特殊児童として精神薄弱児の対極をなす優秀児の問題は、教育的問題児の問題として、教育の現実で解決されなければならない理論的要求からのみならず、社会の福祉増進に将来資しうるかれらの潜在能力をむだにすべきでないという社会的要請面からもとり上げられるべき対象的意義をもっている。

さらに、特殊教育の対象として重視されている欧米の場合に比べて、わが国における優秀児の教育・研究が低段階にある事実にも、それ自体重大な問題であるが、***特殊児童の重要課題として解明を要する多くの問題があるように思われる。

優秀児をめぐるどのような問題領域でどのようなとらえ方で研究を進めようとも、この分野の現状でもつとも喫緊なことは、その基礎的な研究であろう。とくに、児童のパーソナリティに関連する問題は、教育実践の問題としてのみならず、教育科学における究極的な中心課題として、実証的な基礎研究によつて総合的に検討されていかなければならない。

こうした意味で、わたくしは優秀児の特質の問題をとり上げ、それを、発達の特性、性格の特徴、および優秀児の出現を規定する遺伝的、環境的要因の面から基礎的な実態調査によつて考察してみたい。

* Basic study on the characteristics of intellectually gifted children. (I) —General developmental characteristics—

** by Mori, Shigetoshi (Tokyo Domestic Science College)

*** この問題に関しては、一般論として、拙論「優秀児」(特殊児童の心理、昭23, P. 47~94), とくに優秀児の立場と欧米の研究状況については拙論「優秀知能」(現代教育心理学大系7, 特殊教育, 昭33, P. 203~237), および内外の研究, とくにわが国での研究成果については、拙論「天才児」(児童心理学ハンドブック, 特殊児童, 昭34, P. 791~836) 参照。

従来、優秀児の特質については、Terman, L. M. ら⁽¹⁾の生産的な継続研究をはじめ、Baldwin, B. T.,⁽²⁾Hollingworth, L. S.,⁽³⁾ Witty, P. A.,⁽⁴⁾ Hildreth, G. H.⁽⁵⁾ などによる組織的研究によつて各局面から検討されているが、*⁽⁶⁾ それらによつて、知的優秀児が、知能の面のみならず、性格面や身体的発達においても一般の普通児より優れていることが指摘される。そしてまた、ある程度、将来への展望も可能である。**⁽⁷⁾

しかし、これは主にアメリカの児童についての期待であつて、わが国の児童、われわれの優秀児については今後の研究にまたなければならない。これを推進しようとするのが、本研究の出発的動機でもあつた。***⁽⁸⁾

そこで、以下に述べるようなひとつのモデル校を選び、そこで検出された知的優秀児の諸特性を、発達特徴その他の面から普通児との比較において調べ、優秀児一般の特質を明らかにする一手がかりを得ようとするのが、本論文の主目的である。****

II 方法および手続

知的優秀児の特性をできるだけ多角的に調べ、その特異性を探つて検討するため、優秀児の遺伝関係、家庭的背景、生育歴、身体的特徴および健康状態、性格特徴、適応の問題について、テスト、質問紙、面接、および事例研究による研究を行なつた。それに先だち、次のような手続きで知的優秀児を検出し、あわせて、これと比較す

* 拙論「優秀知能」(前出) P. 203~230 参照。

** もつとも、わが国の研究においても、大伴茂や鈴木治太郎などの研究から部分的な傾向を知ることはできるが、知的優秀児のパーソナリティ全体の特質について、とくに将来的可能性について明確に予測することはできない。

*** 拙論「優秀児」(前出) p. 47~48参照。

**** 本研究結果の一部については、日本応用心理学会第26回大会ならびに日本保育学会第12回大会(昭34. 5)において発表した。ここにすこしでも不備を補うことができたなら幸いである。

るための普通児を選出した。

1 優秀児の検出

優秀児を検出するにはいろいろな方法が考えられるが、ここでは、本研究の目的から選定された1実験校の全児童について、推選などによつてではなく、われわれの手で決定的な知能検査を実施することにした。

そこで、被検校として、地理的環境、社会的階層、学校自体の質的面などの点で偏つておらず、かつ協力的であるという観点から、東京都の港区立三光小学校を選び、1～6年の各学年にわたつて知的優秀児を発見するという手続きをとつた。

検出にあつては、まず、すでに学校で実施済み*の集団知能検査（田中B式第1形式）の結果に基づいて知能偏差値（S. S.）65以上**の児童を見出し、全校で男子30名女子15名計45名の優秀児候補を得た。（第1次検出）

実施時期 昭和34年1月24日——3月18日、毎水・土曜の午後1～5時

実施場所 三光小学校図書室

実施者 東京家政大学児童学研究室助手2名および筆者の3名

第1次検出結果の内訳は Table 1 のとおりである。

次に、こうして選ばれた児童全員に対してWISC知

Table 1 優秀児の第1次検出結果
(S. S. 65以上)

学 年	全 校 児 童			検 出 児 童		
	男	女	計	男	女	計
1	90	52	142	5	1	6
2	84	77	161	4	4	8
3	94	98	192	2	3	5
4	89	95	184	3	4	7
5	126	89	215	8	2	10
6	76	81	157	8	1	9
計	559	492	1051	30	15	45

* ただし、1年生に対してはまだ知能検査が行なわれていなかったため、われわれ自身で「低学年用田中B式知能検査第1形式」による集団テストを試みた。

** 後述のように、WISC知能診断検査によるI. Q. 130 以上に対応するS. S. としては75以上ということになるが、75以上のものを得るためには、一応有資格者の範囲を広めて、65以上とする方が好ましい。こうした慎重なやり方によつて、S. S. 64以下のものの中に75以上の知的優秀児が含まれたまま、検出もれになる可能性を防ぐことができる。

能診断検査を個別的に実施し、I. Q. 130 以上のもの男子19名女子6名計25名を検出した。（第2次検出）これを、実験・調査の対象とすべき知的優秀児とした。*

さらにこの実験群と比較するため、さきの集団知能検査のS. S. 45～54を有する全児童について、学年ごとに優秀児と同数の児童を無作為に抽出し、代表的な普通児25名を得た。

このようにして被験児童を決定した後、3月下旬に運動機能の測定、5月上旬に質問紙調査を行なつた。**優秀児群と普通児群との内訳は Table 2 のとおりである。

2 優秀児の出現頻度

こうして検出された優秀児の出現度を見るために、知能段階別にまとめたものが Table 3 であり、学年別にまとめたものが Table 4 である。

Table 3, 4 に示されているように、全優秀児の出現率は2.4%となり、WISCにおける最優の理論値(2.2%)にきわめて近似している。***

性別出現率では男子の方が大きく、全体では女子の約3倍の割合を示している。****また、学年別では6年生の出現度が最大で、3年生のそれが最小である。

III 結果および考察

1 WISCの結果に見られる特徴

優秀児の知能の質的な面を検討するために、各人のテスト結果の平均をプロフィールで示したのが Fig. 1 である。

すなわち、平均I. Q. は、言語性 137、動作性 128、全検査 138 となつて、全般的に相当高い水準を示している。

* もちろん、優秀児を量的に規定する場合、研究者によりまた検査法によつて基準が異なるが、一般にI. Q. 120ないし130以上のものをその有資格者とみるのが妥当であろう。ここでは、ビネーテストで141以上に相当する、WISCでの130以上のもの（最優）をとつた。

** 従つて、本調査のはじめに6年生であつたものは中学1年というように、それぞれ進級しているが、ここでの記述は6年生というようにもとの学年で表わしてある。

*** また、鈴木ビネー検査による知能段階では、130～149（優秀知能）の分布2.35%、150以上（きわめて優秀知能）の分布0.095で、両段階を合わせた分布2.446%にもきわめてよく近似している。

**** 従来、知能の男女差については、その平均値には一般に差異は認められないとされているが、その分散にはかなりの差が見られ、スタンフォード・ビネー・テストで、I. Q. 160以上および40以下においては、男子は女子の約2倍以上存在する可能性が示唆されている。こうした傾向にも矛盾しない。

Table 2 両被検児童群の I. Q. と S. S.

No.	学年	優 秀 児						普 通 児 ※		
		性	氏 名	言 語 性 I. Q.	動 作 性 I. Q.	全 検 査 I. Q.	集 団 検 査 S. S.	性	氏 名	集 団 検 査 S. S.
1	6	男	K. M	132	118	130	79	男	S. K	50
2	〃	〃	M. S	123	128	130	71	〃	Y. K	49
3	〃	〃	K. W	139	121	135	66	〃	O. O	53
4	〃	〃	T. K	139	125	137	66	〃	T a. K	54
5	〃	〃	H a. T	141	121	137	77	〃	S. T	54
6	〃	〃	T. S	151	124	144	69	女	U. A	50
7	〃	〃	S i. K	153	125	146	73	〃	K a. K	46
8	5	女	O n. S	125	129	131	65	〃	O. S	53
9	〃	男	S. I	132	125	133	70	男	S a. H	50
10	〃	〃	I. Y	140	116	133	65	〃	I. T	45
11	〃	〃	O t. S	145	118	135	72	〃	S i. H	47
12	〃	〃	H s. T	151	125	144	67	〃	K o. H	47
13	4	男	S e. K	131	120	130	68	〃	S. M	54
14	〃	女	T. Y	132	121	131	65	〃	S t. H	52
15	〃	男	Y. H	126	128	131	69	女	H. N	54
16	〃	女	K. H	128	129	133	65	〃	S. R	50
17	3	〃	M o. K	136	126	137	66	〃	K u. M	54
18	2	〃	S a. K	132	128	135	78	〃	U. M	45
19	〃	男	M u. K	145	130	144	69	男	K o. M	47
20	〃	女	K. K	148	129	145	67	〃	O. I	48
21	〃	男	S. H	143	140	148	67	女	K m. M	49
22	〃	〃	K. R	158	138	156	78	男	O u. S	50
23	1	〃	K. N	123	143	139	65	〃	K. T	52
24	〃	〃	T. E	131	140	141	69	〃	S. S	45
25	〃	〃	W. A	127	157	149	66	〃	O. A	54

※ 普通児には、この他に 6 年女児 M. T (S. S. 54) が、運動機能の検査に加わっている。

Table 3 優秀児の I. Q. 分布と出現率

I. Q.	知能段階	人 数			出現率(%)※
		男	女	計	
150以上	最 優	1	0	1	0.095
145~149		3	1	4	0.381
140~144		4	0	4	0.381
135~139		5	2	7	0.666
130~134		6	3	9	0.856
計		19	6	25	2.379
120~129	優 中上 中	6	8	14	
110~119		4	1	5	
90~109		0	1	1	
計		10	10	20	

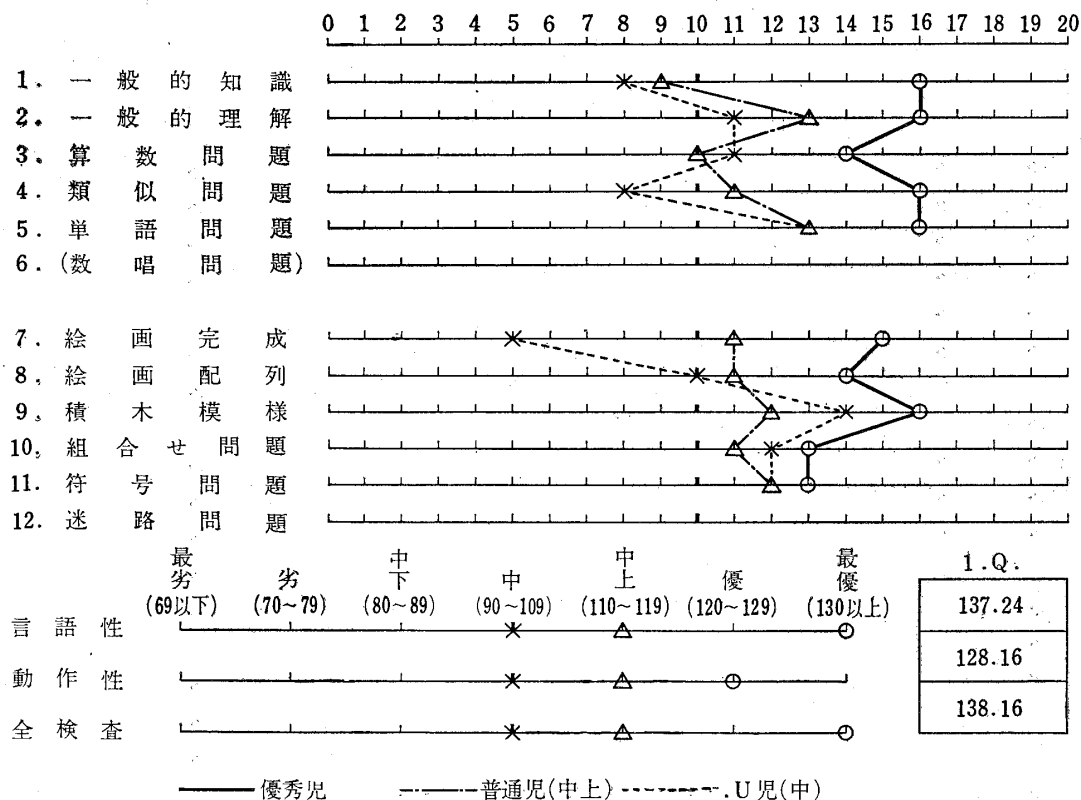
※ 出現率は、全校児童 1051 名に対する百分比を示す。

Table 4 優秀児の学年別出現度

学年	検 出 数			出 現 率(%)※		
	男	女	計	男	女	計
1	3	0	3	3.3	0	2.1
2	3	2	5	3.6	2.6	3.1
3	0	1	1	0	1.0	0.5
4	2	2	4	2.2	2.1	2.2
5	4	1	5	3.2	1.1	2.3
6	7	0	7	9.2	0	4.5
	19	6	25	3.4	1.2	2.4

※ 出現率は、各学年の児童数に対する百分比。各学年の児童数は Table 1 参照。

Fig. 1 WISC知能診断検査平均プロフィール



るが、言語性の I. Q. に比べて動作性の方が 9 点ほど低い。* また、動作性検査のうちでも、組合せ問題と符号問題が比較的に低いことが注目されるが、しかし、一般に下位検査間にはそれほど大きいズレは見られない。

こうした傾向をはつきりさせるためには、普通児の全員を WISC で測定した結果と比較するのが望ましいのであるが、ここでは、さきの第 2 次検出で優秀児の I. Q. レベルに達しなかつたもののうち、I. Q. 119~103 のもの 6 名分の結果をあげるにとどめておく。Table 5 はその I. Q. であり、その平均プロフィールならびに A. U. 児のプロフィールが先の Fig. 1 にいつしよに示されている。

この図によつてわかるように、優秀児、普通児両者のプロフィール間には評価点上大きな開きがあり、とくに言語性において著しい。またその中でも、一般的知識において最も両者のズレが大きい。さらに、一例ではあるが、中位水準者としての A. U. 児は、下位検査間に著し

* こうした傾向は、簡単にその原因を予断することはできないが、後で触れるように、優秀児の読書量が多く、興味の範囲も広いと、豊富な経験的知識をもっていることや、抽象的思考にすぐれていることなどが反映しているものと思われる。この点については、優秀児の性格特徴の検討のうちに考察しよう。

Table 5 普通児(中上)の I. Q. *

学年	氏名	言語性 I. Q.	動作性 I. Q.	全検査 I. Q.
1 年	I. M	112	113	115
3	S u. T	121	109	118
4	S g. S	115	114	118
5	A. U	101	104	103
〃	A m. K	115	117	119
〃	K o. K	114	108	113
計	(平均)	113	110.8	114.3

* この場合の普通児とは、第 2 次検出で見出された「中の上」水準のもの。ただし中位の A. U. 児が 1 名含まれている。

い不均衡を示しながら各評価点が大きく後退し、とくに一般的知識、類似問題、絵画完成において著しい。

2 身体・運動の発達に見られる特徴

このような知能を有する優秀児の特性を把握するためには、まずパーソナリティの基底をなす身体発達の状況から見ていく必要がある。

(1) 身体発育の状況

まず、小学校で定期に行なわれた身体測定の結果によつて優秀児の身長・体重・胸囲の発育状況を 3~6 年生について見てみると、Table 6 のように示される。

Table 6 3—6 年児童の身体測定結果 ※

		人 数		身 長 (cm)		体 重 (kg)		胸 囲 (cm)	
		優	全	優	全	優	全	優	全
6	男	7	78	139.2	137.9	32.8	32.1	67.2	66.8
	女	0	77	—	139.0	—	32.5	—	66.4
5	男	4	91	135.3	132.7	29.8	28.4	65.0	64.9
	女	1	128	126.4	133.3	27.5	28.5	65.0	63.3
4	男	2	97	126.2	126.4	26.3	26.3	63.4	63.5
	女	2	91	128.8	129.4	25.0	25.5	59.0	61.8
3	男	0	96	—	122.0	—	23.2	—	60.3
	女	1	98	117.7	123.0	20.0	23.3	55.0	59.4

※ 昭和33年4月実施の測定結果。優は優秀児，全は全校児童を意味する。

優秀児の人数がきわめて少数であるため，十分な比較はできないが，5，6年の優秀男子の身体発育は，全児童の平均を上廻っている。とくに，身長においてすぐれていることがわかる。

(2) 運動機能の状況

次に，神経筋の運動能力，速度，および協応動作をみるために，握力・打叩速度・狙準の3つの検査を試みた。その実施条件は次のとおりである。

1 握力検査では，小児用握力計で，左右交互に3回試行し，その最高値をとる。

2 打叩検査は，KYS打叩検査器で，左右交互に，30秒間ずつ3回試行し，その最高値をとる。

Table 7 握力・打叩速度・狙準の比較（6年生）

検査	児童	握 力 (kg)		打 叩 速 度		狙 準(秒)
		左	右	左	右	利 手
優 秀 児	範 囲	17.6~27.0	17.6~28.9	80~166	109~205	28~37
	Mdn	19.5	20.7	130	155	31.0
	M	20.7	22.3	129.7	159.3	31.7
	S. D.	3.02	3.1	24.6	28.7	2.97
普 通 児	範 囲	16.5~21.1	16.5~22.4	117~175	112~178	31~44
	Mdn	19.7	20.8	130.5	143	35
	M	19.6	20.4	136.8	146.8	35.5
	S. D.	1.4	1.7	17.9	20.9	3.77
差の検定		P>.90 .20>P>.10		.001>P .90>P>.80		.01>P>.001

3 狙準検査器で，40個のボードを利手で金槌で打ち当て，全部終るまでの時間を，3回試行中の最低値でとる。

6年の優秀児7名と同学年の普通児8名に対して検査した結果を示すと，Table 7 のようになる。

すなわち，t検定にかけた場合，優秀児は1%水準の有意差をもつて狙準にすぐれ，他方普通児は0.1%の有意差をもつて左手による打叩速度にすぐれている。また有意水準を20%にとれば，優秀児は右握力においても普通児よりまさっていることがわかる。その他では，有意の差は認められない。

また，前表の範囲およびS. D. からわかるように，優秀児の得点は概して大きく分散している。

以上のような結果から，優秀児はその身体・運動の発達において普通児に勝るとも劣ることはない。すくなくとも同等にあるが，全般的にすぐれているかどうかについてはなお多くの累積的資料にまたなければならない。

3 生育歴に見られる特徴

優秀児の発達の特徴を，次にその生育歴からみるために，1～6年の両児童群の家庭に対して質問紙調査を行ない，その回答を求めた。

(1) 出生時体重

まず，出生時の体重調査の結果はTable 8 のとおりである。

すなわち，優秀児の出生時体重は， χ^2 検定*にかけた結果，Table に示されるように，1%以下の水準で有意差が認められ，普通児より重く，わが国の一般標準**に照らして重いことがわかる。

(2) 生歯期

Table 8 出生時の体重(%)

体 重 (kg)	優 秀 児	普 通 児
2.3~2.5		2(10.0)
2.6~3.0	7(29.2)	12(60.0)
3.1~3.5	11(45.8)	3(15.0)
3.6~4.0	5(20.8)	3(15.0)
4.5	1(4.2)	
計	24(100.0)	20(100.0)
Mdn	3.25kg	2.8kg
M	3.58	2.97

差の検定 .01>P

注：()内の数字は%を示す。
以下これに準ず。

* 2×2 分割表による簡便法を用いた。以下の検定はすべてこれによる。

** わが国における新生児体重の一般的規準として用いられるものに次のものがある。(単位kg) 吉永氏および文部省によるもの(昭5年)：男3.06，女2.95；厚生省によるもの(昭25年)：男3.13，女3.05

次に、乳歯が生えはじめる時期について調べた結果をまとめたのが Table 9 である。

一般に生歯の時期についてはかなり個人差が大きく、普通6～9か月が平均時期とされているが、検定結果からも、両児童群の間に有意差があるといえない。

Table 9 生歯期

生歯期(月)	優 秀 児	普 通 児
5 ～ 6	6(30.0)	1 (5.3)
7 ～ 8	11(55.0)	12(63.1)
9 ～ 10		3(15.8)
11 ～ 12	3(15.0)	2(10.5)
14		1 (5.3)
計	20(100.0)	19(100.0)
Mdn	7.5月	8
M	7.5	8.42
差の検定	.30 > P > .20	

(3) 始語期

次に、言葉の始期についてまとめた結果が Table 10 に示される。

Table 10 始 語 期

月	優 秀 児	普 通 児
6 ～ 7		1 (5.9)
8 ～ 9	3(18.8)	1 (5.9)
10 ～ 11	2(12.5)	1 (5.9)
12 ～ 13	2(12.5)	5(29.4)
14 ～ 15	4(25.0)	2(11.8)
16 ～ 17	1 (6.3)	1 (5.9)
18 ～ 19	2(12.5)	4(23.5)
20 ～ 21		
22 ～ 23		1 (5.9)
24以上※	2(12.5)	1 (5.9)
計	16(100.1)	17(100.1)
Mdn	14 月	14 月
M	14.4	15.1
差の検定	.50 > P > .30	

※ 優秀児の場合2年および2年5か月、普通児の場合2年6か月の始語期が含まれる。

すなわち、優秀児にはかなり早期に語りはじめるものもいるが、他面言語始期のおくれるものも相当いる。検定によつても、普通児との間に有意の差が認められない。*

* Terman や Witty, P. A. らの研究では、優秀児(平均13か月)が普通児(平均16か月)より早いことが見出されている。

(4) 始歩期

次に歩行の始期について調べてみると、結果は Table 11 のようになる。

Table 11 始 歩 期

月	優 秀 児	普 通 児
10	2 (8.7)	
11		
12	7(30.4)	3(20.0)
13	3(13.0)	2(13.3)
14	3(13.0)	3(20.0)
15	6(26.1)	3(20.0)
16	1 (4.4)	
17	1 (4.4)	1 (6.7)
18		2(13.3)
19以上※		1 (6.7)
計	23(100.0)	15(100.0)
Mdn	13.0月	14.0月
M	13.4	15.5
差の検定	.30 > P > .20	

※ 19以上は普通児の2年6か月を意味する。

すなわち、結果の検定によると、両群間の有意差は十分認められないが、優秀児で1年以前に歩きはじめるものが40%近くもあり、他方普通児で1年5か月以後に歩き出すものが26%余りもある。傾向としては、優秀児の始歩期は、15か月を標準とする一般のそれよりも早いと思われる。こうした傾向は、Terman の調査結果と類似している。*

(5) 文字のおぼえはじめ

優秀児はいつごろから文字をおぼえるようになったか、読みはじめる時期と書きはじめる時期についてまとめたのが Table 12 である。

まず始読期についてみると、優秀児は1%水準以下の有意差をもつて普通児より早期に読みはじめており、始書期の場合もまったく同様の有意水準で普通児よりきわめて早いことがわかる。こうした傾向も、Terman⁽¹⁾ や Witty⁽⁴⁾ の場合に類似しているといえる。*

* Terman が優秀児と普通児の始歩期を比較したのもによると、次のような結果が示される。

範 囲	優 秀 児	普 通 児	これについては拙論「天才児」(前出)P. 817参照。
Mdn	9～18月	11～28月	
M	13.00	13.54	
	13.4	14.0	

** Wittyの優秀児群では、38%が5歳以前に読みはじめており、Terman の場合は、20%が5歳で、6%が4歳前に、またほとんど2%が3歳前にそれぞれ読書している。これに関しては、拙論「優秀知能」(前出)p. 225 参照。

Table 12 始読期と始書期

年齢	項目		項目	
	始 読 期	始 書 期	優 秀 児	普 通 児
年 月				
3: 0	2(10.0)			
3: 8	1 (5.0)			
4: 0~ 2	2(10.0)		2 (9.5)	
3~ 5	0		0	
6~ 8	2(10.0)		2 (9.5)	
9~11	2(10.0)	1(6.25)	0	
5: 0~ 2	5(25.0)	3(18.75)	7(33.3)	1 (6.7)
3~ 5	0	4(25.0)	1 (4.8)	1 (6.7)
6~ 8	3(15.0)	2(12.5)	4(19.0)	4(26.6)
9~11	1 (5.0)	0	0	1 (6.7)
6: 0~ 2	1 (5.0)	6(37.5)	3(14.3)	5(33.3)
3~ 5	0		0	2(13.3)
6~ 8	0		1 (4.8)	1 (6.7)
9~11	0		0	
7: 0~ 2	1 (5.0)		1 (4.8)	
計	20(100.0)	16(100.0)	21(100.0)	15(100.0)
Mdn	5: 1	5: 6	5: 3	6: 0
M	4: 10	5: 6	5: 3	5: 9
差の検定	.01>P		.01>P	

(6) 就学前におぼえた文字量

このようにして小学校入学前におぼえた字の数はどのくらいであるか、これについてまとめると Table 13 の

Table 13 就学前におぼえた文字量

字 数	項目		項目	
	読 字 量	書 字 量	優 秀 児	普 通 児
	優 秀 児	普 通 児	優 秀 児	普 通 児
1~10	1 (5.5)	2(10.5)	1 (5.5)	5(20.8)
11~20	3(16.7)	3(15.8)	5(27.8)	9(37.5)
21~30	2(11.1)	4(21.1)	2(11.1)	3(12.5)
31~40	2(11.1)	1 (5.3)	4(22.2)	3(12.5)
41~50	5(27.8)	7(36.8)	3(16.7)	3(12.5)
51~60		2(10.5)		1 (4.2)
61~70	2(11.1)			
71以上※	3(16.7)		3(16.7)	
計	18(100.0)	19(100.0)	18(100.0)	24(100.0)
Mdn	48	38	38	18
M	58.6	35.3	44.8	26.7
差の検定	.20>P>.10		.20>P>.10	

※ 読字の場合、100, 160, 200 がそれぞれ1人、書字の場合、100 が2人、130 が1人である。

ようになる。

すなわち、読字においても書字においても両群の間に有意差は十分認められないが、20%水準では、優秀児の文字量がいずれも有意に多い。これは、文字のおぼえはじめに関する先述の傾向を裏づけるものといえよう。

以上のような生育歴をもつて成長した優秀児の入学後の日常生活に見られる特徴はどうであろうか。現在の諸行動について調べた結果を、以下において考察してみる。

4 課外活動、興味、遊びから見た特徴

優秀児の特質を理解する上に注目すべき重要側面として、学校での正規の学習以外の課外活動、読書への興味、および遊びの実態について調査した。

(1) 課外学習(おけいこ)

まず正科外の「おけいごと」について、学習の有無、内容、および1週間の学習時間をみた結果をまとめてみると、Table 14, 15 のようになる。

Table 14 おけいごとの有無

おけいごと	優 秀 児	普 通 児	計
し て い る	14(70.0)	2(15.4)	16
していない	6(30.0)	11(84.6)	17
計	20(100.0)	13(100.0)	33
差の検定	.01>P		

Table 15 おけいごと
の種類と時間

種 類	人 数	時 間
書 道	6	15.5
ピ ア ノ	3	3
バイオリン	1	0.5
バ レ ー	1	1
舞 踊	1	1
柔 道	1	10
珠 算	1	4
英 語	1	1
学 習 塾	1	12
計	16	48
平 均	4.36	

すなわち、優秀児の大多数が正科外のおけいごとをしており、普通児との差は1%以下の水準できわめて有意である。その種類も多岐にわたっており、とくに書道の学習者が多いのと、特定の児童が柔道や学習塾(進学教室)に多くの時間を費している点が注目される。

こうした課外に費す学習時間は平均4時間で、Terman⁽¹⁾の場合よりやや少ないが、過半数の優秀児たちが課外学習を行なう傾向は一般に近似している。*

* Terman の優秀群は、過半数が課外に音楽・図画・舞踊・語学などを習っており、それに要する学習時間は1週平均6時間である。拙論「優秀知能」p.224 (前出)参照。

(2) 読書傾向

優秀児の全般的な興味の方向を知することは、児童の特質を把握する上にきわめて必要であるが、これについては性格特徴を考察する機会にゆずり、ここでは読書に対する興味についてみることにする。そこで、父兄をとおして見た被検児（優秀児23名、普通児20名）の読書傾向を、種類についてまとめたのが Table 16 であり、1週間の読書量を示すのが Table 17 である。

Table 16

読書に対する興味(%)

種 類	優秀児	普通児
漫 画	65.2	80.0
童 話	60.9	50.0
学習雑誌	60.9	35.0
冒険・探偵	39.1	25.0
科学雑誌	26.1	20.0
偉人伝	17.4	5.0
文学全集	13.0	20.0
歴史物語	13.0	5.0
科学物語	13.0	15.0
絵 本	13.0	10.0
地 理	8.7	5.0
詩 歌	4.3	5.0
道 徳	4.3	0
工 作	4.3	10.0
作文集	0	5.0
そ の 他	8.7	0
冊数合計	83	58

Table 17

1週間の読書量

冊 数	優秀児	普通児
1以下	1(4.55)	1(5.9)
1	6(27.3)	6(35.3)
2	5(22.7)	6(35.3)
3	3(13.6)	1(5.9)
4	—	—
5	2(9.1)	2(11.7)
6	4(18.2)	1(5.9)
10以上※	1(4.55)	—
計	22 (100.0)	17 (100.0)
Mdn	2.5冊	2 冊
M	4.61	2.44
差の検定	.50 > P > .30	
※	30冊の1人がこれにあたる。	

子どもは教科書以外にどんな本を読んでいるか、その種類は多様であるが、漫画は、いずれの児童にも共通して最も好まれる。優秀児は概して童話、学習について冒険・探偵、科学、偉人、歴史などに関するものを好む傾向があり、また多読であることがわかる。しかし、1週間の読書量について検定を試みた結果は、両児童群間に有意の差が認められなかった。

(3) 遊 び

次に、最近のもつとも好きな遊び* についてみると、結果は Table 18 のようである。

すなわち、最も愛好する遊戯活動は、優秀児も普通児も類似しており、一般に、活動的な社会的遊戯が喜んで選ばれるようである。ただ、優秀児の遊びが、幾分種類に富んでいる点で注目される。

* これまで見て来た調査項目の場合と同じように、父兄の見た児童の愛好遊戯を意味する。

Table 18 最近の最も好きな遊び

種 類	優 秀 児	普 通 児
野 球	6(28.6)	7(38.9)
卓 球	3(14.3)	—
縄 飛 び	2(9.5)	4(22.2)
人 形 遊 び	2(9.5)	2(11.1)
ボ ー ル 投 げ	2(9.5)	1(5.56)
鬼 ご つ こ	1(4.76)	1(5.6)
ぶ ら ん こ	1(4.76)	—
麻 雀	1(4.76)	—
電 気 の 工 作	1(4.76)	—
小 鳥 の 世 話	1(4.76)	—
ハ ー モ ニ カ	1(4.76)	—
裁 縫	—	2(11.1)
虫 取 り	—	1(5.56)
計	21(100.0)	18(100.0)

5 学習行動から見た特徴

優秀児の特質理解に関するもうひとつの重要部面として、家庭や学校における学習行動に注目する必要がある。そこで、家庭での勉強時間、学科の好悪、および学校への出欠状況について調べて見た。

(1) 家庭の勉強時間

学校より帰宅後、平素どの位勉強するか、やはり父兄をとおしてたずねたのであるが、Table 19はその1日の平均勉強時間であり、Table 20は1週間の平均である。

Table 19

1日の家庭勉強時間

時 間	優秀児	普通児
0.5	5(21.7)	3(15.8)
1.0	10(43.5)	8(42.1)
1.5	1(4.4)	1(5.2)
2.0	3(13.0)	4(21.1)
2.5	1(4.4)	0
3.0	3(13.0)	3(15.8)
計	23 (100.0)	19 (100.0)
Mdn	1 時間	1 時間
M	1.37	1.47
差の検定	.70 > P > .50	

Table 20

1週間の勉強時間

時 間	優秀児	普通児
1~2	—	2(10.53)
3~4	5(21.7)	3(15.80)
5~6	4(17.4)	1(5.26)
7~8	5(21.7)	1(5.32)
9~10	3(13.0)	5(26.26)
11~12	—	1(5.26)
13~14	—	1(5.26)
15~16	4(17.4)	2(10.53)
17~18	—	1(5.26)
19~20	—	1(5.26)
21~22	1(4.4)	—
23以上※	1(4.4)	1(5.26)
計	23 (100.0)	19 (100.0)
Mdn	8時間	10時間
M	8.7	9.7
差の検定	.20 > P > .10	

※ 25時間を意味する。

この2つの表に示されているように、優秀児は、普通児に比べて家庭では概して勉強しない。20%の有意水準ではあるが、むしろ普通児の1週間の勉強時間の方が多い。しかし、1日の場合は、有意差は認められない。いずれにしても、こうした傾向は Terman⁽¹⁾の優秀児に類似しているが、Terman の場合よりは、われわれの優秀児の学習時間の方が長い。*

このように優秀児が比較的の不勉強の観を呈しているのは、さきにみたように、じつは彼等の好きな読書や課外学習に多くの時間を費す結果の反映と思われる。

(2) 学科の好悪

次に、現在、児童の最も好きな学科は何か、父兄の回答をまとめると Table 21 のようになる。それによると、優秀児と普通児との間には好悪の順位にずれがあり、とくに一般の全児童との間ではそれが著しい。すなわち、優秀児の最も好きな学科は理科であるが、一般児（全校児）はあまり好まず、一般児の最も好きとする体育を優秀児はあまり好まないといつたぐあいである。

Table 21 最も好きな学科(順位)

教科※	理	国	算	音	体	図	社
児童	科	語	数	楽	育	工	会
優 秀 児	1	2	3	4	4	6	6
普 通 児	3	2	1	7	3	3	6
※※							
全 校 児	5	3	2	4	1	7	6

※ この外に、「家庭科」は5、6年のみの学科であるが、本調査では挙げられておらず、全校調査では、8位の「道徳」に次いで9位となつている。

※※ 33年10月、4～6年の全児童について、学科の好きな順に挙げさせたものをまとめたものである。

しかし、全優秀児を直接に調べてみると、好きな学科として算数(26.1%)が、嫌いな学科として国語(17.1%)がそれぞれ最も多くあげられ、約22%のものは、好き嫌いなし(8.7%)、または、嫌いな学科なし(13%)となつていて、親のみた好悪との間に若干の喰違いがみられる。**

(3) 出欠状況

なおここで、1年間における出席状況を欠席日数につ

* Terman の優秀児は、家庭では1週に平均2時間の予習を行なう程度で、大して勉強していない。拙論「優秀知能」(前出)p.222 参照。

** これは当然な「ズレ」であつて、他の項目についても予期されるところである。また教師をとおして調べるなど、方法を異にすれば必然的に「ズレ」が予想される。したがって、そのこと自体研究上重要問題となるが、ここでは、本調査との関係においてのみ触れる。

いてみると、Table 22が示される。

Table 22 欠席日数

日 数	優秀児	普通児
皆出席	9	6
1 ～ 5	10	11
6 ～10	3	7
11 ～15	2	
16以上※	1	1
計	25	25
Mdn	4 日	4 日
M※※	3.2	3

差の検定 .50>P>.30

※ 優秀児の場合45日、普通児の場合95日をさす。

※※ 上記2人の長欠を除いた平均。

すなわち、全般的な出欠状態については、両群の間に有意差は認められないが、傾向としては優秀児に皆出席者が多いことがわかる。また、その出席率は Terman⁽¹⁾の優秀児に比べるとやや低いが、だいたい類似の傾向にあると思われる。*

6 学業成績からみた特徴

最後に、知能との間に積極的な相関があるとされている学業成績は、優秀児の特質理解への手がかりとして重要である。** この場合の学力は、一般に、標準学力検査によるいわゆる教育指数(educational quotient, E. Q.)によつて示されるが、ここでは、標準版新田中B式学力検査によつて得た学力偏差値(A. D.)および5段階法による教科成績で示すことにした。

6年の優秀児の学業成績を示すと Table 23 のとおりである。

すなわち、S. S. と A. D. との相関を、ピアソン(K. Pearson)の偏差積法で算出したものによつてみると、両者間のrは、算数においてきわめて著しく、ついで理科の場合が高い。しかし、国語においては低く、社会ではほとんど相関がみられない。***

また、教科成績のうちでは、一般に、理科に次ぎ国語および算数の成績点が高くて、音楽および図工が低い傾向にあるが、これはさきの学科好悪の順位にはほぼ対応す

* Terman の優秀児は学校への出席が規則的で、大多数の児童(男54%, 女70%)がきわめて熱心な学校好きであることが指摘されている。拙論「優秀知能」(前出)p.220—222 参照。

** Terman などの研究で、I. Q. と E. Q. との相関が高いことが指摘されている。拙論「優秀知能」(前出)p.222—224 参照。

*** 理科の場合のrの信頼度は

$$P. Er = 0.6745 \times \frac{1-r^2}{\sqrt{N}} = 0.155 \therefore r = 0.627 > 4P. Er$$

となつて、完全に信頼することができる。しかし、国語の場合は、 $P. Er = 2.563 \therefore r = 0.386 > 3P. Er$ となつて、信頼することはできない。

Table 23 優秀児（6年生）の知能と学業成績※

児童	※※※※ I Q, 学力	※※※ I. Q. (S. S.)	国 語 (A. D.)	社 会 (A. D.)	算 数 (A. D.)	理 科 (A. D.)	音 楽	図 工	家 庭	体 育	※※ 暦年齢
1 K. M		130 (79)	4 (62)	5 (63)	5 (72)	5 (64)	3	5	5	5	12; 5
2 M. S		130 (71)	—	—	4 —	4 —	4	3	4	3	11; 11
3 K. W		135 (66)	5 (71)	5 (62)	4 (72)	5 (75)	4	5	5	4	12; 7
4 T. K		137 (66)	4 (59)	3 (53)	3 (70)	4 (63)	3	3	3	5	12; 1
5 H a. T		137 (77)	3 (59)	3 (45)	4 (63)	4 (54)	3	3	3	3	11; 10
6 T. S		144 (69)	5 —	5 —	5 (74)	5 (73)	5	4	4	4	12; 0
7 S i. K		146 (73)	5 (66)	5 (60)	5 (74)	5 (60)	4	3	3	3	11; 10
S. S. と A. D. との相関 (r)			0.386	0.173	0.835	0.627					

※ 学業成績は、5 学年時の最終成績を示す。 ※※ 暦年齢は昭和 34 年 1 月 1 日現在による。

※※※ I. Q. は34年 1 月実施の WISC による知能指数, S. S. は32年 5 月実施の標準版新田中 B 式による偏差値。

※※※※ 標準学力偏差値(A. D.)は、30年 4 月実施の田研式標準学力検査による偏差値を示す。

るものとして注目される。

このようにして、全般的に、I. Q. の高い知的優秀児は学力においても高水準を示し、教科成績もすぐれていることがわかる。

要 約

普通の 1 小学校における知的優秀児の検出によつてその存在率を確認し、そこで試みたいいろいろな調査によつて、優秀児の発達のな特徴を検討した。それぞれの調査面において、少なからず知的優秀児の優位が認められたが、その他にも、傾向としてみられるかれらの優秀性が暗示された。と同時に、同等性も少なからず示された。そこには、調査法や実施面その他についての難点もいくらか反省点として見出されるのであるが、この調査を基礎として、残された次の課題、とくに性格特徴の把握へ進み、知的優秀児の本質の解明へ接近しようとするものである。*

付記：末尾ではあるが、本研究の遂行にあたつてあたたかい御助言を賜つた山下俊郎先生、および調査実施に際して快く御協力くださった三光小学校校長遠藤五郎先生ならびに積極的に御尽力くださった外村近教諭その他の先生方に対して心から感謝の意を表した

* 知的優秀児の性格特徴に関する一調査はすでに実施済みであるが、さらに第 2 次調査を準備中である。性格特徴については、第 2 報告で発表の予定である。

い。なお、実施に多大の労を要した諸種の検査および調査は、東京家政大学児童学研究室の上原万里子、伊藤礼子両助手の手によるものである。あわせて深謝したい。

文 献

- (1) Terman, L. M., et al.; *Genetic studies of genius*: Vol. I. Mental and physical traits of a thousand gifted children. Stanford University, 1925.
Cox, C. M.; *Genetic studies of genius*: Vol. II. The early mental traits of three hundred genius. Stanford University, 1926.
Burks, B. S., D. W. Jensen, and L. M. Terman; *Genetic studies of genius*: Vol. III. The promise of youth; follow-up studies of a thousand gifted children. Stanford University, 1930.
Terman, L. M. and Oden, M. H.; *Genetic studies of genius*: Vol. IV. The gifted child grows up; twenty five years, follow-up of a superior group. Stanford University, 1947.
- (2) Baldwin, B. T.; Methods of selecting superior or gifted children. *Yearb. Nat. Soc. Stud. Educ.*, 23 (1), 1924, 25—47.
- (3) Hollingworth, L. S.; *Gifted children: Their nature and nurture*, 1926, New York: Macmillan.

—; *The Terman classes at Public School*
500. *J. Educ. Sociol.*, 10, 1936, 86~90.

—; Children above 180 IQ, Stanford-Binet, 1942.

Hollingworth, L. S. and Taylor, G. A. ; Size and strength of children who test above 135 IQ. *Yearb. Nat. Soc. Stud. Educ.*, 23(1), 1924, 221~237.

- (4) Witty, P. A.; A study of one hundred gifted children. *Univ. Kan. Bull. Educ., State T. C. Stud. Educ.*, 1, No. 13, 1930.

—; A genetic study of fifty gifted children. *Yearb. Nat. Soc. Stud. Educ.*, 39(II), 1940, 401~408.

—, and H. C. Lehman ; The play behavior of fifty gifted children. *J. Educ. Psychol.*, 18, 1927, 259~265.

- (5) Hildreth, G.; Characteristics of young gifted children. *J. Genet. Psychol.*, 53, 1938, 287~311.

- (6) 森 重敏：優秀知能．現代教育心理学大系，第14巻，特殊教育，昭33，203~208.

- (7) 森 重敏：天才児．児童心理学ハンドブック，特殊児童，昭 34，

- (8) 森 重敏：優秀児．児童心理叢書，V，特殊児童の心理，昭23，47~94.

(1959年 8月29日原稿受付)